

令和2年度第1回 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館運営協議会会議録

日 時 令和2年10月6日（火）13時30分～15時18分

場 所 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研修室

出席委員 6名

岡村道雄会長 石川宏之副会長 高田和徳委員 福田友之委員

山下治子委員 川口桂子委員

※会長・副会長選出後。石川副会長はリモートで出席。

事務局 5名

伊藤教育長 工藤館長 松橋副館長 渡参事 小久保主幹

- 次 第
- 1 教育長挨拶
 - 2 会長・副会長選出
 - 3 会議 案件（1）令和元年度事業報告について
（2）その他

3 会議

○案件（1）令和元年度事業報告について①

・事務局説明 ※教育普及事業について説明。

・質疑応答

（会長）

説明をしていただきましたけれども、御質問等ありませんでしょうか。高田委員、いかがですか。

（高田委員）

夏季特別展の世界遺産関係の展示が、結構多くの方に来ていただきましたよね。例えば、学校の生徒さんたちに声を掛けたりしたからですか。それとも、一般の方々が世界遺産の展示だからと来られたのですか。

（事務局）

学校には、企画展毎に必ずチラシやポスターを、全生徒分お送りしていて、そこは変わっていないので、恐らく一般の方が増えたのだらうと考えております。

（高田委員）

それはやはり国内推薦が決定したということが、大きいのですか。

（事務局）

はい。国内推薦のニュースが出る前の段階、春先ぐらいから観覧者数、入館者数が伸びていました。そういった状況で夏にニュースが入り、さらに盛り上がりを見せたというような状況となりました。

(山下委員)

地域との連携の中で、合格祈願絵馬というのがありますが、これは市内の櫛引八幡宮とどういう連携になっているのですか。八幡宮の元々ある絵馬があって、そこに「いのるん」が、ちょっと参加したのか、それとも元々の絵とまったく違うもので作ったとか、その辺教えていただきたいです。

(事務局)

デザインは従来のもではなくて、「いのるん」がメインです。今手元にないのですが、桜咲くというような形で合格祈願という絵馬で、オリジナルの絵馬を商業高校と一緒に作成し、八幡宮さんでお祓いをしてもらい、絵馬として販売していただきました。

(山下委員)

もうなくなっちゃったのですか。完売ですか。人気のほどはいかがだったのでしょうか。

(事務局)

館に一つ見本の保存がございます。高校に確認してみたいと思います。

(山下委員)

高校生が縄文案内人フォーラムで発表されたということですか。

(事務局)

絵馬と案内人は、また別の事業になります。

(山下委員)

いや、おもしろい取組かなと思っていました。

(高田委員)

案内人は、県教委の事業みたいですよ。それは、青森県全域でほかの地域も含めて、高校生に委嘱して案内してもらうような取組を始めているわけなのですか。

(事務局)

はい。令和元年度が最初の年で、まず八戸地域の七戸町と八戸市で実施され、今年度は津軽地域のつがる市と弘前市で実施されていると思われま。

(高田委員)

それは世界遺産の、構成資産の遺跡に限り、養成講座みたいなのをやるのですか。

(事務局)

はい。県から研修会や勉強期間のスケジュールが来たのですが、内容が1日、2日の学習でいきなりガイドという日程だったので、縄文是川ボランティアのほうから、もっと多い日程と一緒に勉強してからやろうということで、縄文是川ボランティアのほうで日程を全部作っていただき、県のスケジュールの倍ぐらい勉強して、高校生にガイドをしていただきました。

(高田委員)

実際に来館された方を案内して歩いたわけですか。

(事務局)

はい。ガイドしていました。

(福田委員)

是川縄文館は体験学習に力を入れていて、バラエティある体験学習をやっていますね。お伺いしますが「トチの実で縄文クッキング」を無料体験教室でやっていますけれど、具

体的にはどのような内容でしょうか。トチの実を拾うところからですか。

(事務局)

いいえ、トチの実のほうは職員とボランティアであらかじめ拾って、皮まで剥いておきます。体験教室ではアク抜きから始めます。

(福田委員)

アク抜きはここでやったのですか。

(事務局)

はい。広葉樹の灰と一緒に煮て、アルカリ中和をして、それをトチもちにして加工して食べてみるということです。

(福田委員)

最終的には食べたのですか。

(事務局)

はい。毎年、食べますが、アクを抜きすぎると、無味無臭になってしまって、アクを抜ききれないと結構苦めなので、毎年、いろいろな味が楽しめるイベントとなっています。

(福田委員)

お腹壊さなかったですか。

(会長)

何故ですか。お腹壊したことがあるのですか。

(高田委員)

結構、多いですね。口が合わない人というか。

(福田委員)

それから、「縄文の布を編む」というのも体験学習ですね。講習はどなたが教えるのですか。ここで行うのですか。

(事務局)

はい。学芸員とボランティアと一緒に。

(福田委員)

これは、どの辺から始めるのですか。カラムシ刈るところからではないですね。

(事務局)

はい。刈るところと糸にするところは事前にボランティアと学芸員でやっています。

(福田委員)

カラムシはどこで刈るのですか。

(事務局)

縄文学習館周辺に、カラムシ畑を作っているのです、そこで育てています。

(福田委員)

作っているのですか。すごいですね。

(事務局)

刈り取って、たたいて、繊維を取って、糸を作って、という作業は毎年やっています。

(福田委員)

そうすると、こちらに編み機があるのですか。具体的には何を作るのですか。コースターのようなものですか。

(事務局)

そうです。

(福田委員)

すごいですね。それから、この火おこしというのは。

(事務局)

はい。是川縄文館は、舞錐のみです。

(福田委員)

あと、「琥珀の勾玉作り」というのは、原料はどこから入手しているのですか。

(事務局)

久慈琥珀さんから仕入れています。値段が1,000円なので、再生琥珀という、屑を集めて成形し直したものを材料として使っています。

(福田委員)

これは実際やってみて、どうですかね。穴開けてみて。

(事務局)

滑石よりは少し固い時もあるのですが、それほど難しくありません。

(福田委員)

そうですか。おもしろいですね。分かりました。

(川口委員)

この会議の参加は初めてになります。いつも感じることは、是川縄文館は、駅や中心部から少し離れているため、アクセスで誘導の仕方が非常に課題になっているということです。施設は非常に魅力的で立派で雰囲気も個性も持っているところなので、アピールすると引きつけられる施設なのではないのかなと思っていました。先程の説明で世界遺産の登録に向けた取組などで、来館者が非常に増えたということは、大変良かったと思っていました。アクセスがあまり良くない中で、こういうきっかけがあると、やはり来る方は増えるのだなと思い、いいきっかけになったのだなと思っていました。世界遺産登録に向けた他の遺跡群との連携で効果的なPRで何かなされたことはあるのかということ、この単独だけではなくて周辺とですね。遺跡群の関係の方々との連携、そのPR方法、あと県外から来ている来館者というのは考古学のファンというか、それに関心を持っている人が多いのか、それとも気軽に来た方が多いのか、そういったことというのはお分かりでしょうか。

(事務局)

はい。まず連携につきましては、三内丸山遺跡と是川遺跡のボランティアはかなり歴史があるものですから、昨年度からつがる市さんや七戸町さんが、是川縄文館に研修に来られています。そういった繋がりがあります。それから、それぞれの遺跡の魅力について伝えるような講座を、それぞれの市で開催しており、学芸員がお互いに講師として出向くようなことを、前々年度ぐらいから始まっています。また、小学生を招いて子どもシンポジウムなども、伊達市や北秋田市で開催されていますので、そういった交流が今、段々と始まっているような段階です。

また、県外からお越しの方の来館目的ですが、アンケートのほうで、そのクロス集計を載せていないので、すぐにはお答えするのは難しいのですが、私の感触としては、ほとんどが観光でいらっしゃる方が多いというふうに感じています。

(副会長)

地域連携のところ、是川縄文隊というのがありますが、実際どういう人たちが具体的に何人ぐらいの有志で活動されているのか、プロフィールと活動の内容について具体的に教えていただきたいというのが一つ、あと二つ目が着ぐるみですが、昨年度人が入れるようなものを作ったのですかね。「いのるん」のマスコットキャラクターを活かし、着ぐるみを着て色々な各地の舞台を訪れたりしたのでしょうか。また、「いのるん」の画像を提供したり、こちらには八戸商業高校の3年生の研究課題を報告されたりと書いてありますが、「いのるん」のキャラクターを地元の商売のお土産の中で使ってもらえるような、何かあると教えていただくとありがたいです。

(事務局)

まず一点目の是川縄文隊ですが、年報の51ページのほうに、組織の概要が御紹介してありますので、御参照いただければと思います。平成24年に設立がされて、毎年、活動していただいたのですが、本年3月に活動の維持が困難だということで、解散をされました。

(副会長)

そうだったのですね。

(事務局)

はい。それから、「いのるん」の着ぐるみですが、これは昨年度ではなくて、もう少し前の段階で、地元の演劇をされている方が作成されたものを寄附していただいたものになります。ここ4、5年活用させていただいております。「いのるん」の活用につきましては、年報の46、47、48ページの細かい表の中に出てくる「いのるん」というものが、活用の事例となっておりますので、御参照いただければと思います。感想というか感触としましては、新しい活用は特段まだ起きていないかなと、新しい商品が生まれたりはしていないと思います。

(副会長)

ありがとうございました。

(会長)

よろしいですね。それでは、次に移ってよろしいですかね。

(山下委員)

「いのるん」の着ぐるみですが、普通作ったら何十万かしますよね。四、五十万したりすると思うのですが、寄附してもらったのですか。すごいですね。その演劇の方が作られたということなのですが、博物館としては細かい部分というか、博物館のキャラクターとして使うにも耐えるというようなことでOKされたということなのでしょうか。それと中に入る方は、誰か決まっているのですか。決まっていなかったら、どういう動作が必要だとか、この着ぐるみ「いのるん」に対しての、どういうキャラ付け、動き方とか、普通は祈っているだけなので、歩いている「いのるん」、どういうふう演技指導をするのかなと思いました。

(事務局)

「劇団ハチプー」という方々から、そういった依頼があった際は、最初、どういう目的で、「いのるん」の画像を借りたいかということから始まり、着ぐるみを作りたいということが分かって、後ろ姿ですとか、人形を貸し出したりして製作するというので、我

々も出来上がりを見せてもらった時に、非常に良くできていたので驚きまして、何かあったら貸してくださいということをお願いしていて、行事がある毎に借りて使っていたのですが、劇団のほうで使用することがあまりないので、縄文館のほうで活用してほしいということで寄附をいただいたという経緯がございます。

(山下委員)

なるほど。

(事務局)

「いのるん」の着ぐるみの中の人については、他の館のマスコットキャラのように特定の人物ではないです。ただ、身長が168センチぐらいじゃないと足の部分のはみ出てしまったり、あるいは小さいとだぶついてしまうということがあって、それぐらいの身長の職員でしか入れないような状況にはなっています。わりと視野は狭いのですが、動きは色々できるので、じゃんけんもできますし、ターンなど機敏な動きも可能なので、入る人の能力によって動きが変わるような、変幻自在なキャラクターだと思います。もともとは座っているはずなので、立っている時点でもう大分キャラは崩壊しているのですけれども。子どもたちには非常に好評いただいております。

(会長)

もともとその劇団は何のために作ったのですか。

(事務局)

彼らの創作劇の中で、「いのるん」を出したいということで使われたということです。シナリオはちょっと覚えておりません。

(会長)

方々に貸し出したりせず、独占的に使っているのですか。

(事務局)

青森県の縄文フェスタですとか、縄文遺跡群のPRイベントなど、県に貸し出すことはあるのですが、基本的には縄文館が活用しています。

(会長)

ここの館でも活躍しているのですね。凄いですね。

○案件（1）令和元年度事業報告について②

- ・事務局説明 ※埋蔵文化財調査事業について説明。
- ・質疑応答

(会長)

いかがですか。何かご質問ありますか。

(福田委員)

八戸市では、個人住宅の発掘調査がありますよね。恐らく試掘調査までは行政で予算措置するでしょうけれども、この発掘調査は全部国庫補助ですよね。

(事務局)

はい。個人住宅の本発掘調査は、国庫補助対象になっておりまして、補助事業で調査しております。

(福田委員)

市が50%ですか。

(事務局)

国が50%で市が50%近く。県からも、いただいております。

(福田委員)

県はほとんどないですね。

(会長)

3%と書いてあったが。

(事務局)

1.6%です。

(福田委員)

100万円の調査だとすれば、県は1万6千円というわけですか。

(会長)

1.6%か。

(福田委員)

八戸市はよく個人住宅まで発掘の手が回るなど思っていました。恐らく他の市町村ではなかなか。

(事務局)

八戸市のほうでは、発掘調査、現場に出られる職員もある程度おりますし、社会教育課の窓口のほうで、住宅建築の際には確認をしてくださいということで、細かく周知を続けてきておりました。長年続けておりますので、だんだんこの効果が上がってきて、皆さん、届出していただいております。

(会長)

効果とか、そういうことは周知徹底されてきたということですか。

(事務局)

はい。そう考えております。

(福田委員)

例えば文化庁に予算説明とか、補助金申請とかはこちらでやられているのですか。

(事務局)

発掘調査の補助金申請事務は是川縄文館で行っております。

(福田委員)

文化庁に行くわけですね。

(事務局)

はい。毎年ヒアリングにも行きます。

(福田委員)

すごいですね。ご苦労さまです。分かりました。他の市町村に聞いていただきたい話ですね。

(高田委員)

最近では、住宅を建てる原因者のほうで、神経質になっていて必ず確認に来ますよ。まず、最初に遺跡の確認をして、それから計画を立てる。個人住宅でも。だから、非常に面積は多いですね。うちのほうでも。

(福田委員)

なるほど。分かりました。

(高田委員)

長芋の調査ですが、私も実は、1回現場に行って、焼失住居が出たから行って見せてもらったのですが、長芋の畑を調査するというのはすごいですよね。あれもやっぱり原因者負担はないのですか。まったくの国庫補助、公費だけですか。

(事務局)

個人の農地として長芋作付けをされるものに限って国庫補助で本調査しております。

(会長)

長い歴史があってね。私が文化庁にいた時から、長芋の、それこそトレンチャーが入っているようなところを、補助金ですずっとやってきたよね。

(山下委員)

長芋というのは、地下深くなるからということですか。

(会長)

地下深くなるから掘らなきゃいけないので、補助金の対象にしているのですよ。

(山下委員)

ゴボウは駄目なのですか。

(事務局)

ゴボウも対象になっているようです。

(会長)

でも、具体的にあまり聞かないですね、ゴボウはね。

(事務局)

はい。長芋の産地ですので。

(会長)

それがありますよね。青森県がきちんと手当してほしいと頑張ったことなのじゃないのですかね。

(福田委員)

長芋の場合、毎年、少しずつ場所をずらすでしょう。最初は全部、線上に掘られるけれども、つながっていくから、最終的には全部つながっていくからね。

(会長)

深いんですよ。下に行くようにトレンチャー入れているわけで。そうしなきゃ曲がっていくので。

(山下委員)

そうなんですね。まっすぐいくものではないんですね。

(会長)

やはりそれを補助するためにトレンチャーを深く入れるので、長芋は補助具のようなのを入れて、それに沿って伸びるようにしたりしているとか。だから、スマートな曲がらないいい長芋を作るなどあるんじゃないのですかね。最高のブランドだものね、青森はね。

(高田委員)

東北町とか、向こうも多いですよ。向こうもやっぱり調査をやっているんですかね。まあ、遺跡がなければいいかもしれませんが。

(事務局)

そこまでは把握しておりません。

(福田委員)

七戸町の二ツ森貝塚がありましたね。トレンチャーですごかったですね。

(会長)

あそこは表土が浅いから厳しかったですね。山下委員、何かないですか。

(山下委員)

子どもたちの発掘体験とあるのですが、先ほど出てきたものと同じのですか。

(事務局)

考古学クラブとは別の日程で、一般の日程がございました。

(山下委員)

これは小学生が対象ですか。

(事務局)

はい。小学生対象で募集をしました。

(山下委員)

子どもたちにその発掘が初めてな子が多いと思うのですが、どんな指導をされたのですか。

(事務局)

考古学クラブの方は、かなり学習的なところを、最初にレクチャーの時間を長めにとって、何故遺跡は掘るのか、壊されてしまうのか、ここは史跡で本来は壊されないのだけでも、何で掘っているのかとか、どうやって掘らなきゃいけないとか、そういうレクチャーを30分ぐらいやって、それから現地に行ったらは移植ベラなどの道具の扱い方を学んで、それからようやく掘ります。

(山下委員)

結構、さっとできるものなのですかね。

(事務局)

当然ですが、発掘作業員のように掘れないです。水平に掘れないですね。どうしても狸掘りになっていってしまうし、土器が出ると嬉しくてすぐに取り上げてしまいます。学んでもらうために、大きなものが出たり、まとまって出たりしたら、残しながらやってみようとか、声を掛けながら体験してもらっているのですが、夢中になってしまって、手が止まらないですね。作業員の方も補助で付いています。最後のほうは大分上手くなっていきます。

(川口委員)

発掘現場の現地公開説明会は非常に興味深く、ポイントを見るのはとてもいい勉強になると思います。私は、集落の全体像がどうだったのかなというのを想像してみるのが結構おもしろくて、こちらの展示の中にはそういうパネルとかもあるので、それを見て想像しているのですが、実際にこの辺りのどの辺がそうになっていたのか、未だにちょっと分からなくてですね。実際にそういう集落だったところを巡る、こういう発掘体験もしながら、巡るミニツアーみたいなものはあるのでしょうか。民家とか住宅地があったりして、なかなか入り込んでいくのは難しいかもしれないし、道なきところも多いかもしれないのですが、そういう散策的な散歩がてらにツアーができるような、そういう体験

学習というのはあるものなのか、やっていたのでしょうか。

(事務局)

考古学クラブでは、そういったプログラムをやりまして、是川中居遺跡を歩いてみて、遺跡のここにはこれがあったというのを、実際に歩いて散策するプログラムを用意しました。

(会長)

遺跡巡りみたいなものですかね。

(川口委員)

ここは集落ですよ、こういう地形のところには、こういったものがあるのですよとか。

(会長)

では、話は二つのような気がします。私もよく思うのですが、発掘の現場に行って、発掘している人たちが現地説明会をやる。現地に人を集めて、それを公開するのですけれども、自分の掘った発掘の穴の説明しかなさくないのですよね。こういう地形の中に、例えばここは日当たりがよくて、平らなところだから、こういうところの場所に集落がこういう範囲でありますよ、周りにはこんな植生があったよ、など説明する調査員はほとんどいないですね。あれは、私まずいなと、いつも思っているのですけれども。自分の掘っているところしか目がいていないのですよ。そうじゃなくて、ここにその昔の人が来て、この場所を選んで、ここに住む場所を作って、ここには墓地があって、今掘っているのはそういう全体像を解明するために、このところを掘っているのです。掘った結果、居住の場所の隅っこだったということが分かりましたよと。その対極的な、立地学的に言うのですけれども、そういう説明がない場合が多い。それは、現地説明会の際に気をつけてほしいなといつも思います。例えば、風当たりがこっち強いから、集落はこの谷を挟んで、こういうところに展開しているのですよ、という当たり前のその立地学と言うのですかね。占地学というのか住地考古学なんて昔言ったのですけれども、そういう説明がなくて、どうしてもここを掘る、じゃあ何でそこを掘っているのですかと聞かれ、そういうことに対する説明がほとんどないですね。例えば、ここはこういうふうなことで家が建つ、その家の範囲だけ、まず掘っているのですよとか、そういう説明もないことが多いですね。それは、ちょっと注意してほしいなと、いつも思います。

(川口委員)

栗林とか栗の木とかをどの辺に植えていたのかなというのを、想像してみるの面白いので、全体像が分かるような見学会があれば、私も参加してみたいな思っております。

(会長)

今の視点、非常に大事だと思います。どうしても説明は専門的に自分の担当した場所しか、自分の穴だけ責任を持って掘っていると思っているけれども、その全体の周りの中でそこがどういう場所なのかということ、なかなか意識して掘っていないのではないのかなという気がするのですが、その辺はいかがでしょう。

(事務局)

現地説明会でそういった説明がないというのは、確かにそうだなと思います。これからの現地説明会にご意見を反映させていきたいなと思います。

(会長)

それでね、もう一つ、日頃思っていることがあって、その説明するときの用語なのです

けれども、業界用語で説明していて、よく自分たちには当たり前の言葉なのですけれども、分からないことが本当に多いですね。それは、現地説明会の用語だけではなくて、遺跡案内パネルだとか、展示のパネルもある意味はそうなのですけれども、できるだけ専門用語を避けてほしいなと私は、いつも思います。

それは、少し置いておいて、一つ聞きたいのは、その用語統一的なことを発掘調査の手引きを作って10年以上経ちますよね。その中で一番変わって、私はトラブルが起こっていないのかなと気になるのは、今日もありますけれど。竪穴建物と皆さん、言っていますよね。あれはマスコミでは今、どうなっているのですかね。竪穴建物と扱っていますか。竪穴建物って何ですか。多分、竪穴建物という言葉を使わないで、あるいは竪穴住居という言葉は使わないで、集落を説明することはできないです。だから、必ず使っているはずなので、どうですかね。その普及の程度と、それから不具合が生じていないのかなというのは、気になるのですけれど。用語統一したことが今、どうなっているのでしょうか。例えば埋土（マイド）という言葉とか、覆土（フクド）という言葉とか、埋土（ウメツチ）と読んだりしているのかとか、どうなのですかね。文化庁が言ったから、さっとそれに習って、変わっているところは変わっているのだけれども、相変わらずそんなことは関係ないところもあるし。それから気になるのは、マスコミ用語はどうなっていますかね。出版関係とか。そういうことも、こういう場所は気にして欲しいですね。一般とつなぐ場所なので。高田委員はどうしていますか。

(高田委員)

ちゃんと用語を、そういうふうに書いています。

(会長)

書いていますか。それで問題ないですか。

(高田委員)

時間はかかったけれども、最近は徹底してきたような感じはしますね。あとマスコミの方は、うちのほうで説明資料などを配付しますので、そのまま書いてくれます。最近は竪穴住居と書くのはかなり少なくなりましたね。

(会長)

新聞社やマスコミによっては、新聞用語の考古学用語という統一マニュアルが載っていたりするのでよね。東奥日報があるのかは知りませんが。そういうので用語をできるだけ統一するように、読売とか毎日とかはやっていましたね。

(福田委員)

世界遺産で色々なパネルを作る時には、用語統一とかしているのですか。

(高田委員)

大体今の文化庁でやっているものでそういうふうな感じではやってはいますけれども。

(福田委員)

竪穴住居は使わないのですか。

(会長)

使わないですね。だけど、そこにも色々な問題があって、大型竪穴住居という言葉が残っていたり、必ずしもその後の使用実態とか、あるいは不都合だとか、それから一番気になるのは、やっぱり教科書が変わっていないんじゃないんですかね。

(高田委員)

確かに教科書の場合は時間がかかると思いますけどね。

(会長)

そう言ってしまえばそういうことなのですが、ちょっと用語もこういう欠陥であれば、よりその注意してほしいなということにはしますね。ここのことを言っているのではないですよ。こういう全体の問題として。ちょっと余計なことを言いましたけれども。いいですかね、川口委員。何か埋蔵って分からないというイメージが強いんじゃないのかなと、私は、いつもそれを恐れているのですけれども。特殊な集団が、特殊の用語を使って、特殊に説明している、私たちの関心事と違うことを、何か堂々と語っているという、私はいつもそういう恐れを持っているのですけれども。それを上手く伝えてくれるのは、新聞だったりすると思うのですけれどもね。石川委員どうぞ。

(副会長)

年報の31ページの現地公開、現地説明会、発掘体験ということで、特にこの発掘体験ですかね。8月10日に行われて、1回目は9人で2回目は4人ということですね。昨年度ですかね、この会議でそういう体験をすることによって、考古学ファンが増えてくるんじゃないかなという、そういった発言も確かあったと思うのですけれども、それを実際、こういった形で催していただいたことは、ありがとうございます。

今後、こういうことというのは、継続的に行われる予定なのか、それともたまたま今回、こういったことをご厚誼いただいたのか、その辺、今後の方針というか、教えていただければありがたいと思います。

(事務局)

はい。史跡の一王寺遺跡の内容確認調査につきましては、今年度も引き続き発掘体験を行いました。今年度は、午前中に考古学クラブの皆さんが体験しまして、午後、一般の小・中学生の方々で行いました。今年度はコロナの感染状況を踏まえ、人数の制限はしましたけれども、6組ということで募集して、3日ほどですぐ満員になりまして、人気が高いと感じました。来年度以降も、一王寺内容確認調査は続ける予定でございますので、こちらのほうでは、来年度以降も発掘体験は継続し、開催の方向でいきたいと思っております。また他にも条件が整う遺跡の調査がございましたらば、検討していきたいと思っております。

(副会長)

はい。ありがとうございます。

(会長)

なかなか原因者負担で発掘しているところでは、やりにくいですよ。そういう意味では補助事業で発掘しているところとかね。あるいは、もう一つの観点は、やっぱり発掘現場って、活用のネタなのだと思うのですよね。発掘そのものが。発掘ってどうやってやられているのかって、知らない人がほとんどだし、もう一つ思うのは昔、表面採集ってやったでしょう。表面採集ってやったことありますか。踏査って言葉だとか。

(事務局)

試掘調査の前に、少し現地を確認するという感じでやったことがございます。私自身ではないのですけれども、北インター第2工業団地の予備調査として縄文館の関係職員が分布調査をしました。

(会長)

変な言い方をするのだけれども、遺跡ってどういう状態になっているかって、普通の人にイメージできないんだよね。掘って初めて、この下にこういうのがあるのかなというのが感動したりするけれど、普通、掘った遺跡、今、全国46万カ所に遺跡があるけれども、それがどういう状態になっているかというのを川口委員イメージできますか。遺跡ってどういう状態になっているのか、私たち、どうやってそこが遺跡だと分かるかとか全然イメージできないでしょう。

(川口委員)

分からないです。想像できません。

(会長)

下に遺物が埋もれている場所を、耕作したりすると、下にあった昔の土器の欠片だとか、そういったのが上に浮いてくるのですよ。上に浮いてきたその土器や石器材料の欠片を表面から探して拾うのです。

(川口委員)

年代のとおり重なっているわけではないんですね。

(会長)

年代ごとに普通は重なっていないです。重なってあってもかき回しているから、全部かき回されているのですよ。それを拾うことによって、ここからここまでこの範囲の下には遺跡があるのだと。そうやって行政的には遺跡の所在を確認していくのですけれども。私みたいな考古ボーイって、子どもの頃から遺跡で遊んでいた人間は、遺跡への接点というのは、やっぱり遺跡って遺物を拾う、その宝探しがおもしろくて、今、それが専門になっている人がもの凄く多いのですよね。今、そういうことは一般の人たちは、あまり分からないのではないかなと思いましたね。だから、今日、是川を歩いてみて、畑の部分幾つかあるけど、ああいうところに物はどんなふうに散らばっているのかなと、なかなか分からないですよね。ちょっと話が長くなりますけれども、例えば糸魚川の長者ヶ原という遺跡、大きな環状集落なのですけれども、ほとんど発掘していないのですよ。ところがこれが環状集落だと分かったのは、みんな遺物採集して、どこから土器が出てきたかずっと掘っていったら、環状になったのですよね。この下に竪穴住居がずっと輪になってあって、その範囲をちゃんと抑えると13ヘクタールぐらい、やっぱりあるのですよ。ああ、大きい環状集落だなというのは、表面から遺物を拾うだけでも分かるのですよね。それは、ちょっと専門的な話なのですけれども、私が言いたいのは遺物って、そんなふうな状態で落ちているのだという、この是川でも畑のところがあるじゃないですか。ああいうところは要するにどうなっているのかなというのが。あとは、それこそ遺跡を説明する時に、教えるとみんな持っていかれちゃうということを使う専門家がよくいるのだけれど、そんなものは一般の人が持っていったって、たかが知れているのではと私はいい加減に思っているのですけどね。

(福田委員)

難しいんじゃないですかね。落ちているのを拾わせるというのは。

(会長)

拾わなくてもいいし、拾ったらみんな召し上げるべきですね。

(福田委員)

そうですね。拾得物の問題もあるしね。

(高田委員)

最近は、それができなくなっているのですよね。畑が、耕作放棄地がすごく多いのでうちのほうでも。そうなる前にうちは幸い、平成の最初の頃に、町内全部の分布調査をやったから、もう遺跡は全部おさえられたのですけれども。最近、その補足調査をやろうといっても、歩いて全然草ぼうぼうで拾えないですよ。ただ八戸周辺は、まだ、そういう畑なんか多分やっているところの近くにあるから拾えるかもしれないですけれども、大体もうほとんど拾えないです。分布調査さえもうできなくなっちゃいましたね。

(会長)

はい。状況変わってますからね。

○案件（１）令和元年度事業報告について③

- ・事務局説明 ※来館者アンケート・市政モニターアンケート結果について説明。
- ・質疑応答

(会長)

御質問等ありますか。石川委員、事前に資料を送られてきたと思いますが。

(副会長)

どうもありがとうございます。来館者アンケート集計で多くの人が「大変満足・満足」ということはよくわかっているのですが、15 ページ目の「不満・大変不満」のところを見たら、「遺跡の背景となる大地の成り立ちや環境についての説明がほしい。」というのがありました。これはまさにジオパークとのつながりのことで、是川の遺跡群との関係の展示解説があるといいのかなと思いました。また今後、こういうことを含めて企画展などあるといいのかなと改めて思いました。

あと、「風張遺跡の看板が外にある？」というのがありますが、ここの縄文館に来て、周辺の整備と関係してくると思うのですが、いかに現地を見て、歩いてそういうことを感じ取れるような、そういう野外博物館的なそういうつながりを持てる空間デザイン的なものが、ここからこの世界感を見据えて、展示のリニューアルの時には、そういったところが改善されるといいのかなというようなことを思います。

あと、下の方に「漆のジャパンロードの研究成果がよくわからなかった」という、そのジャパンロードというキーワードは、私が15年程前に八戸に移り住んだときに、文化庁と地元イベントに参加したことがあるのですが、本当に素晴らしい、こういう世界の宝がここにあるんだなということを再認識したということがあるのですけれども、こういったところも今後、世界遺産と併せてもう少しPRできるように展示に手を加えるなり、また、以前もお話をしたけれども、こういった研究ですね。色々なところとタイアップをして、研究を進めていくという、そういった世界感を一つきっかけとして、こういうネットワークを作って強化をしていくような。そういった何か戦略があるのかなというのが、ここのアンケートから読み取れるのではないかなと思います。

感想的なところと意見みたいなものなのですけれども、こういったことに対して今後、何か改善とかそういう予定とかあるのでしょうか。

(事務局)

来年で開館10周年を迎えますので、リニューアルを考えている部分もございますので、こういった御意見、非常に参考になりますので、総合的に研究して展示に生かせる部分は検討していきたいと考えています。

(福田委員)

一つだけ、ちょっと質問なのですけれども。八戸市の場合、例えば一般の市民が、「うちには縄文土器がありますよ」、「八戸市に寄附させてください」といった場合に、是川縄文館はそれを受けられますか。それとも博物館へ行ってくださいとなるのでしょうか。

(事務局)

はい。そういったお話は数年に1回ぐらいあります。ただ保管が可能であれば、引き続き保管をお願いしています。もう破棄するとか、そういった話をされる場合は、博物館と協議して、どちらかで引き受けさせていただいています。

(福田委員)

そうですか。もし、「是川の遺物を持っています」という方が、是川縄文館に寄附したいとなった時は、場合によっては受けられるということですよ。

(事務局)

はい。

(福田委員)

そうですか。三内丸山ではそれはできないのですよね。県立郷土館に行ってくださいとなるのですよね。

(高田委員)

三内丸山遺跡の遺物もですか。

(福田委員)

そうです。

(会長)

遺物の取扱も、いろいろ微妙なところありますよね。

(福田委員)

収蔵スペースの問題もありますしね。以上です。

(会長)

この頃ネットを見ていると、ネットオークションに遺物が出てきますね。しかも、自分の掘ったものをオークションに流して、逮捕された県職員がいましたね。結局、何故だか知らないけれども不起訴になりましたね。それから、自分が掘っていた遺物を、有名な遺跡、有名な古墳なのだけれども、その遺物整理をすると言って、自宅に持ち込んだりしてね。色々なところで遺物の取扱で問題を起こしているような気がします。

また、それとは別にネットオークションに骨董的に売りに出ている、そういうのがあって、どこなのか本当に気になるのですよ。そういうとばっちりか、こういうところに来るのではないかと気がして、現にそういう話もありますし。

もう一つ気になるのは、分析科学の人たちが、分析で最近、本当に私と同じような歳の、どこかの県博の大先生が懲戒免職になりましたよね。詳しくは皆さんが御存じかと思うのですけれども、是川縄文館もそれとは若干関係があったのですよね。あの先生が了解なしに分析資料を持って行ってしまっただけとか。

(高田委員)

八戸市博物館のほうはありましたね。この間、報告がありました。

(会長)

そうですか。あの方、かなり広域にそういうことをやっていたので。今、その議論をするつもりはないのですけれども、あれだけ社会問題で大きくなっていること自体に、私たち、非常に憂慮する部分があるような気がしますね。私はあの方もかわいそうだなと思います。そうやって、今までやっていたわけじゃないですか。それを了解なくやったと。それもどうなのかなと。今、私が言いたいのは、そういう取り扱いに関して社会問題化しているので、こういう施設だから、その辺それなりに対応されているのではと思いますけれども、これは古くて新しい問題なので、こういう機会に保存、管理の面から考えて欲しいなと思います。

○案件（２）その他

- ・事務局説明 ※是川縄文の日の制定、展示ガイドアプリケーションの説明。
- ・質疑応答

(山下委員)

アンケートに1階のカレーの臭いが2階にあがってきて、あれはどうなのだろうかというのが何件か出ていたのですが、それは致し方ないのかなとは思っているのですが、そういうふうに嫌なのかなと思う方がいらっしゃるので、2階のところに、「そういう臭いがするかもしれません」とか、「いい香りですよ」とかと、逆にそういうフォローするような説明というか、何かがあったらいいのではないかなと思います。

(会長)

なるほど。今、ああいうカフェのようなものを抱えている博物館などで、そういう問題を聞いたことがありますか。ああいう何か家庭の臭いがするのは、ちょっとグレードがどうのこうのとか、雰囲気を壊すとか。

(山下委員)

他の施設は、こちらの建物のような構造になっていないと思うのですよね。カフェはカフェで、レストランはレストランで完結できているというか。臭いが上まで届くというような想定はしていないし、建てる時にはカレーというメニューもなかったと思うので、それなら今後の運営の仕方では何かできないかなと。カレーを楽しみにしている方もいると思うので。

(事務局)

ありがとうございます。検討したいと思います。

(会長)

はい。ありがとうございます。私もさっき、それを聞いたかったです。幾つかあれにカレーの話が出ていたので、どうしたものかと思って。やめるわけにいかないしね。やめたら私が困りますし。

(川口委員)

あそこは仕切ることにはできないですかね。やっぱり特別なカフェという感じで、気分転換できる場所なので、何かあれだとホールの一部に、片隅にあるという配置になっているので。あとレストランとミュージアムとで、びしっと仕切ればいいような気がするので

すけれども、予算の関係もあるのでしょうか。

(事務局)

はい。消防法との関係などもありますので、これから仕切りが作れるかどうか、そういったことも含めて、検討が必要かと思います。ありがとうございます。

(副会長)

ちょっと最後に補足として。何回来館したかという質問に対して、2回から6回というのが結構多いということで、こういったリピーターが増えているということが、何かすごく皆さんの日頃の色々な普及活動の賜ではないのかなということを改めて再認識しました。本当に数限られたスタッフの中で、これだけの事業をやっているということに関しては、本当に僕もいつも感銘を受けて、皆さんの賜というか、そういった成果が本当に現れるなということをつくづく思います。

あとはちょっと補足で説明しましたところ、世界に向けていかに情報発信をしていくのかという、いわゆるコロナ禍、アフターコロナの後ですね。そういうインバウンドを含めた、八戸の方が世界の宝なんだということを、海外にどういうふうに伝えていく、そういうものをどう発信していくのかという、その辺を見据えて、今後、この来年度の事業計画が愛されるといいなという、そういった希望や期待も含めて、次の会議は2月か3月ですかね。また皆さんとお会いできればなと思います。